

人肉密売組織に追われる美女と用心棒

『サイレントムーン』



片桐夫婦と従業員の恵理は、趣味で始めた会員制カニバリズム系サイトによって安定的な収入を得ていた。ある日、1本の電話によって、彼らの平穏な暮らしが根底から覆される。

片桐夫婦は、人肉売買組織から逃れるために、兄の片桐譲とともに流浪の旅に出る。

作者 大黒達也

『サイレントムーン』

作者 大黒達也

一．あらすじ

片桐夫婦と従業員の恵理は、趣味で始めた会員制カニバリズム系サイトによって安定的な収入を得ていた。ある日、一本の電話によって、彼らの平穏な暮らしが根底から覆される。片桐夫婦は、人肉売買組織から逃れるために、兄の片桐譲とともに流浪の旅に出る。暗躍する人肉売買組織と、元陸上自衛官である片桐譲との壮絶な戦いが火蓋を切って落とされる。

二・登場人物

片桐 譲（カタギリ ジョー）

陸上自衛官出身であり、殺しのエキスパート。残虐な性格の持ち主。敵であれば容赦なく殺害する。

片桐 諒（カタギリ リョウ）

ホームページ制作会社を経営する傍ら、会員制のカニバリズム系サイトを運営する。兄の譲とは違って、弱気で温和な性格

片桐 忍（カタギリ シノブ）

諒の妻。抜群のプロポーションと美貌の持ち主。人肉売買組織に付け狙われる。

戸田 恵理（トダ リエ）

忍の友人であり、ともにカニバリズム系サイトのモデルを務める。極上の肢体を持った美女。

加納 圭吾（カノウ ケイゴ）

日本では名の売れたノンフィクション作家。中国で人肉売買組織の取材中に行方不明となる。その後、策略により、組織の長となり、世界的な人肉売買組織に君臨することとなる。

三目 次

第一章 始まり

第二章 魔手

第三章 人肉オークション

第四章 逃走

第五章 超高級人肉レストラン

第六章 生贄

『本編』

第一章 始まり

ファインダーの向こうには、盛り上がった白い乳房を持った美女が、全裸で食卓テーブルの上に横たえられていた。女は清楚な容貌に切れ長の美しい二重瞼を持ち、色白で絹のように滑らかな肌を持ち主であった。身長は百六十五センチくらいで、手足が長く抜群のプロポーションを持っていた。年齢は二十代前半といったところだ。

女の周りにはトマトやレタス等の野菜が、上品

に盛り付けられていた。唯一一席の椅子には、これまた若く美しい女が、豊満な肢体をタキシードに包み、ナイフとフォークを持ち、妖艶な笑みを浮かべながら、今まさに目の前の女肉料理を食さんとしていた。



「最高だよ。忍！後少し太腿を開いてくれないか。

6 恵理ちゃん。忍のオマ＊コにトマトを擦り付けて

くれ」

三脚に固定されたデジタルカメラを操作していた三十代前半に見える男が女達に注文を付けた。

「これでいい？」

恵理と呼ばれたタキシードを着た女が、忍と呼ばれた裸女の膝に、ドレッシングが付いたミニトマトを擦り付けた。

「ああ……」

「感じているのか？忍」

忍は上を向いて清楚な顔を歪め、喘ぎ声を漏らした。

「忍ちゃん。超可愛い！」

恵理がミニトマトをひとつ忍の膝に押し込んだ。

「駄目……。恵理ちゃん。ああ……。」

恵理はドレッシングと愛液に塗れたミニトマトを口に入れた。

「忍ちゃんのソースがついてて超美味よ！」

「いいぞ。恵理ちゃん。その調子だ。今度はオマシコにナイフを入れてみてくれ。優しくだぞ」

恵理が焦らすようにゆっくりと刃のついていないナイフを差し込んだ。

「ああ……。冷たい……。お願い恵理ちゃん。

忍を食べないで……」

「もう駄目」

恵理はナイフを置いて、目の前に剃毛され、むき出しとなったサーモンピンクの膾に口を付けて

激しい勢いで舐め始めた。指先を忍のアヌスに忍び込ませ、淫らに動かした。

「いいい……」

忍は、背筋を仰け反らせるようにして、鋭い喘ぎ声を上げた。

「しょうがないな。休憩とするか」

男が、ズボンとパンツを床に脱ぎ捨て、忍の寝ても崩れない盛り上がった乳房を鷲掴みにして、可愛い口に黒々とした男根を差し込んだ。忍は潤んだ瞳で、片桐を上目使いに見ながら、音を立てて、美味しそうに男根をしゃぶり始めた。ジユパジユパという嫌らしい音がスタジオ内に響いていた。

そこは、札幌市郊外にある個人住宅の地下に造られたスタジオルームであった。三十畳ほどの空間には、撮影用の食卓テーブルが配置され、そこでは家主である片桐諒とその妻、忍と、忍の友人である戸田恵理が、全裸となり互いを貪り合っていた。



部屋の片隅には、人一人が入れるくらいの巨大なガラス製の鍋が、巨大なコンロに載せられていた。壁の一面は棚となっており、デジタルカメラやデジタルビデオが整然と並べられていた。

また、壁の一面はガラス張りとなっており、その向こう側は裏庭に造られた換気と採光用の空掘りへと続いていた。そこからは、日差しが、燦燦と降注いでいた。厳冬期であっても快晴であれば、空掘りに降り積もった積雪に陽光が反射して眩しいくらいであった。

さて、家主の片桐諒についてであるが、彼は、民間の中小企業からホームページ制作を請け負う有限会社を経営していた。会社といっても妻の忍と友人の恵理が社員のすべてであり、本業の方の売上はたいしたことは無かった。片桐は、本業の腕を生かして、会員制のアダルトサイトを運営していた。こちらの方が遥かに羽振りは良かった。

カニバリズム系のサイトで、主に忍や恵理をモデルとして、会員にエロティックな画像やビデオを提供していた。モデルは一般からも、インターネットの掲示板を使って公募を行っていた。

会費は月千円で、3千人くらいの会員を集めていた。

ホームページの呼び物は、いわゆる人肉オークションであった。実際に人肉を売り買いするわけではなく、あくまでバーチャルなものであった。

全裸にした忍や恵理を食卓テーブルに載せ、乳房や尻や太腿をパーツごとにアップで撮影し、それをホームページに公開し、オークションにかけた。

もちろん、お遊びと言うことを会員達も百も承知であり、適当な値段を付けて競り落とした。

代金支払い後に送られるのは、女達が身に付けたパンティやブラジャーであった。当然のことながら誰も文句を言うものはいなかった。その日が来るまでは……。

ある日の午後、地下のスタジオルームでは、片桐夫婦と社員の恵理が、ビデオ制作を行っていた。部屋の中央には、水をはられた巨大なガラス製の鍋が配置され、全裸となった忍が中に入れられていた。

コンロに載せられた鍋の底には、ホースがセツトされ、外部から空気を送られる仕組みとなつて

いた。それで、沸騰しているように見せかけるのだ。

傍らには、極上の裸身にエプロンを纏っただけの恵理が立ち、巨大なシャモジを持って鍋の中を覗きこむようにしていた。鍋の中には、忍の他にタマネギやニンジン等の野菜が入れられていた。

これは年に数回、某ホテルで開催する会員パーティの呼び物でもあった。その際は、全裸にした忍や恵理や一般公募の女達を用意した巨大な鍋に、四十五度くらいのお湯や、予め熱を通した豚肉や野菜と一緒に入れ、人肉スープを作り会員達に振舞った。人肉スープは、女達を引き上げてから、本格的に加熱した。会員達は、鍋から上げら

れテーブルの上に横たえられた女達を鑑賞しながら、熱々のスープに舌鼓を打った

「いいよ。恵理ちゃん。今度はスープをシャモジで掻き回してくれないか。忍はもっと苦しそうな表情を浮かべるんだ」

片桐は女達に指示をしながら、鍋から伸びていた電気コードの先に付けられた機器のスイッチを押した。

「あああ……。駄目……」

忍が美しい顔を歪ませ、鋭い喘ぎ声を上げた。コードの先は、忍の膣とアヌスに忍び込ませたピンクロータへと繋がっていた。

「いいぞ。忍。お前は、茹で上げられ食べられる

んだ」

片桐がデジタルカメラのフレンダーを覗き込みながら、上擦った声で言った。と、その時、片桐のポケットから携帯の着信音が聞こえてきた。

「こんな時に、タイミング悪いな。少し休憩しよう」

女達に告げてから、部屋の片隅に置いてあるソファに座り、携帯電話に耳を付けた。

「もしもし……」

「お忙しいところ、済みません。会員の加納と申します」

「会員？何ですかそれ？」

「ですから、貴方が運営しているカニバリズムサ

イトの……」

片桐はどこで電話番号が漏れたか不審に思っていた。当然、会員には知らせていなかった。

「何の御用ですか？」

「本日、貴方の口座に四千万振り込みました。当然、オークションで競り落としたのは私です。忍さんと恵理さんを渡していただきたい」

「ふざけるな！冗談はたいがいしてくれないか！」

「冗談？私は本気ですよ。あの二人なら最高の食肉が取れるでしょう……」

最後まで聞かなかった。携帯を切り、ソファテーブルの上に置いてあったノートパソコンを開い

た。悪戯だと思いながらも、言い知れぬ不安を抱いていた。取引銀行のサイトにアクセスし、ユーザアカウントとパスワードを入力した。

「うっ……」

片桐は思わず呻き声を上げた。紛れも無く四千万円は振り込まれていた。全裸姿にタオルを巻いただけの忍と恵理が、心配そうに片桐の顔を覗き込んでいた。

翌朝、恵理はいつまで待っても出社しなかった。忍が携帯に電話を入れたが、繋ながら無かった。心配した二人は、中央区にある恵理のマンションを訪れたが留守であった。その日の午後、郵便受けに一通の封書が入れられた。

片桐が中身を確認すると、それは恵理の人肉受領書であった。愕然とした面持ちで二人は長い間、見詰め合っていた。

第二章 魔手

「もしもし。兄貴か？」

「どうした？ 声の上擦っているぞ」

「ちょっとやばいことになっているんだ。今、ど

こにいる？」

「近くさ。定山溪のホテルで女と温泉三昧だよ。

それも厭きてきたがな」

電話の向こうから、女の押し殺したような喘ぎ声が届いてきた。それもどうやらひとりではな

さそうだ。

「……助けてくれないか」

「可愛い弟を見捨てると思うか。ところで金はあるのか？ホテルの支払いがきつくなってきたんだ」

「金ならいくらでも払うよ。命を狙われているんだ。今も監視されているみたいだ」

「わかった。一時間でそっちに行く。それと預けてあったバックに薬ビンが入っているが、一粒忍ちゃんに飲ませておけ」

「何故？」

「ちよつとの間、眠っていてもらうだけさ」

電話はそれで切れた。ジャスト一時間後、玄関

のチャイムが鳴った。モニターに兄の片桐譲（カタギリジョー）が映っていた。譲が鍵を開けると、分厚い胸板を持ち身長百八十センチを軽く超える譲（ジョー）が、大きな皮袋を二つ肩に担いでいた。

「何だ？それは」

「話は後だ。入るぞ」

譲が諒を押しよけるように、大股で居間へと向かった。カーテンが閉められていることを確認して、皮袋の口を開けた。

「監視役だ。凄い美女だぞ」

袋には猿轡を嵌められた美しい若い女と、ぐつたりとしてピクリとも動かない女が入っていた。

二人とも黒皮のロングコートを着ていた。

「こっちの女は息をしていない」

「ああ。首を押し折ったからな」

「何で殺したんだ！」

「俺に銃口をむけたからさ」

譲は平然とした表情のまま、ベルトに差していたベレッタ九二Fと、シグサワープ二二〇の自動拳銃をソファテーブルに置いた。

「こいつらはプロだ。こんなチャカは中々手に入らない。お前達相当やばい連中に狙われているんだな。そうだ忍ちゃんは何処だ？」

譲は他人事のように言った。

「二階で寝ているよ。……兄貴には俺が趣味で始

めたサイトのことを話していたよな」

「ああ。女を食いまくる悪趣味なやつだろう」

「悪趣味は余計だよ。サイトでやっていた人肉オークションで、忍と恵理ちゃんが大金で買われたんだ」

「いくらで？」

「二人で四千万だ」

「馬鹿な！人間一人が二千万円だって！半分の一千万だって買い手は見つからないさ」

譲が唸るように言った。

「金は、昨日銀行に振り込まれた。恵理ちゃんとも連絡が取れない。恵理ちゃんや忍をどうするつもりなんだろう」

「……四千万か。そいつは大金だな。売春目的で二千万とは高すぎる。人身売買という線かな。中東諸国の金持ちに売りつけるとかな」

「俺達を守ってくれたら全部あげるよ」

「そうだな。準備金は必要になる」

「引き受けてくれるのか！」

「あたりまえだろう。取りあえずは、ここからは離れた方がいい。一時間で必要な荷物をまとめろ。」

それと空いている部屋とバスルームを使わせてくれ」

譲が床に横たえていた捕虜の女を肩に担ぎ上げた。

「どうするんだ？」

「決まっているだろうが」

譲はそれ以上、言おうとせずウィンクをしてバ
スルームの方に消えた。

二階にある客間では、中央に置かれたダブルベ
ッドに捕虜の女が全裸で横たえられていた。シャ
ワーを浴びせたのか、黒髪が濡れていた。傍らに
は、譲が全裸姿になって、女を見下ろしていた。
女の裸身は白く滑らかで、シミがひとつも見当た
らなかった。今流行りの女優に引けを取らぬ美貌
の持ち主でもあった。譲は無造作な感じで女のア
ヌスに人差し指を差し込んだ。女が低い呻き声を
上げて、背筋を仰け反らせた。最高の締め具合で
あった。空いている方の人差し指を悌毛して剥き
出しとなった腔に差し込んだ。

「うっ……」

女が猿轡の下から、低い呻き声を漏らした。捕虜の女に対し、憐憫の情など一欠けらも無かった。犯すだけ犯し抜いて、尋問した後に、口封じのために処分するつもりであった。

盛り上がった白い乳房に口を付け、乳房を舐め回しながら、腰を前後に突き動かした。膣が男根を痛いくらいに締め上げていた。アヌスにも指先を入れて掻き回した。指先に絡むような粘膜の感触がたまらなかった。

女は呆然とした表情で天井を見上げていた。可能なら猿轡を外して、舌を吸出し存分にしゃぶりたいが、舌を噛み切られるのが落ちなので、

それは我慢した。

五分ほどで一回目の欲望を膣に吐き出した。女はよほど悔しいのか、目に涙を溜め、嗚咽を漏らしていた。

譲は女の股間に座り、精液と愛液で濡れた膣に人差し指と中指を入れ、膣内を擦り上げるように激しく動かした。

「これから聞くことに、はいかいいえで答える。はいは、首を上下に、いいえは横に振るんだ」

指先を動かしながら、尋問を始めた。

「お前達の他に監視役は何人いる？五人か？十人か？」

女は答えようとせず、鋭い目付きで讓の顔を睨み付けた。讓はいつそう激しく指先を動かした。やがて女の視線がぼやけ始めた。快感と戦っているのか、しきりに、猿轡の下から低い喘ぎ声を漏らし始めた。

「アジトは何処にある？」

讓は女が口を割ることなど、最初から期待していなかった。今はただ、髑り抜くことが目的だった。敵の男に犯され、快感に悶えることがいかに屈辱であるか思い知らせてやるつもりであった。膣内を擦りながら、アヌスに空いている方の指先を捻じ込んだ。女の全身がビクンと波打った。尿道口から透明な液体が噴出した。

「潮吹きやがって。そんなによかったのか？この
淫売め」

女を裏返しにして、泣きたくなくなるような美しい
尻を舐め回した。尻を両手で割って、きれいなア
ヌスを目で存分に犯し抜いた。顔を押し込んで舌
先をアヌスに捻じ込んだ。女の喘ぎ声が高くなっ
た。どうやら精神のタガが外れたらしい。

アヌスを十分に湿らせてから、一気に硬くなっ
た男根を突き込んだ。女が鋭い喘ぎ声を上げ、全
身を仰け反らせた。膣やクリトリスを指先で刺激
しながら、激しい勢いで腰を前後に動かした。凄
まじいまでの締め付けであった。数分で二回目の
欲望を吐きだした。

丁度一時間後、譲が全裸姿の女を引き摺るよう
にして居間に現れた。女は朦朧とした表情で、よ
たよたと歩いていた。諒が居間で荷造りをしてい
た。

「最高だったぜ。お前も真由美を抱いてみるか？」

「真由美というのか？その女の名は？」

「いや、俺が勝手につけた名だ。こいつは一言も
しゃべらなかつた。名無しじゃ都合悪いだろう。

準備はいいのか？」

「ああ。後は車に積みこむだけだ」

諒は、びつしりと詰まったボストンバックを持
ち上げながら言った。

譲は再び、真由美を皮袋に押し込んだ。諒が車

庫に入っているランクルに荷物を入れた。それから、二階に上がり、眠り続ける忍を両腕に抱いて降りてきた。忍は、Ｔシャツにミニスカートを穿いていた。ミニスカートから伸びた形のいい長い足が艶かしかった。諒が忍に黒皮のロングコートを羽織らせ、車庫へと向かった。

「相変わらず色っぽいな。お前のカミさんは」

諒が、諒の後姿に声をかけた。

「兄さん。変な気を起こさないでくれよ」

諒は、女好きの兄が、心配でならなかった。忍はどんな男でも虜にする美貌と肉体を持っていた。兄が本気になったら、自分では阻止できないと恐れていた。

「俺は、こいつらの車で行く。後に付いて来い」
譲も二人の女達を入れた皮袋を担ぎ上げ家を出た。数分後、諒と忍が乗るランクルと譲が運転するBMWが、深夜の住宅街を走り出した。

譲は助手席を倒し、真由美を入れた皮袋を載せていた。皮袋から裸の下半身が出ていた。譲は膾やアヌスを指先で騷りながら、片手で運転を続けた。

譲が運転する車は、寒風が吹きすさぶ雪原の真只中に停まった。目の前に廃品回収業者の薄汚れた立て看板が見えた。そこから先には、有刺鉄線と木杭でできた塀に囲まれた周囲四百メートルほ

どの空間が広がっていた。中には廃車となった
様々な車種の車が堆く積まれていた。忍と諒は、
市内のホテルに残して来た。

譲（ジヨウ）はBMWを降りて、鉄製の門扉の
前に立ち、インターホンのボタンを押した。

「譲じゃないか！久しぶりだね。最近羽振りはい
い……」

「悪いが、挨拶はそのぐらいにしてくれないか。
凍えそうなんだ」

譲がインターホンから聞こえてくる女の声を遮つ
た。

「悪かった。今開けるよ」

目の前の門扉がガラガラという音を立てて、開

けられた。譲はBMWに戻り、敷地内へと進入していった。

建坪百坪はありそうなログハウスの一階に、三十畳ほどの居間が造られていた。レンガで造られた重厚な暖炉には、真つ赤に燃え上がる薪がパチパチと音をたてていた。中央に配置された檜の木製で重厚な食卓テーブルには、黒縁メガネをかけた小太りの中年女と、譲が向かい合って座っていた。

「何が望みだい？」

「銃器と弾薬。それに始末して欲しい女が二人だ。車も置いていきたい」

譲は傍らの床に置いておいた二つの皮袋のうち、

一つ目の口を開けた。中から、全裸姿の女の遺体が出てきた。

「何だ。仏さんじゃないか。いい女なのにさ。生きてりゃ。ただで引き取ってやったのに」

「慌てるな」

譲は口元に笑みを浮かべながら、もうひとつの口を開けた。中から全裸に剥かれ、後ろ手を手錠で拘束され、猿轡を嵌められた真由美が出てきた。譲が猿轡を外した。真由美が譲の顔を睨み付けた。口を開くことは無かった。

「上玉じゃないか！あんたが最高の美男子に見えるてきたよ」

中年女が、満面の笑みを浮かべた。

「デザートイーグルとレイニングブル四五四とイングラムはあるか？それに手榴弾も欲しい」

「手榴弾だって。戦争でも始める気かい？」

中年女は、床に横たえられた真由美の裸身を食い入るように見詰めながら、上の空といった感じ
で答えた。

「そんなところだ」

「いいよ。全部まとめて、三百万だ。銃弾はサー
ビスしとくよ」

譲は懐から分厚い紙袋を取り出して、テーブル
の上に放り投げた。

「商談成立だな。偶然だが、三百万入っている」

「そうだね。品物は後で用意するよ。その前に女

を見せておくれ」

譲は床に横たえられた真由美を軽々と抱き上げ、
中年女の目の前に置いた。

「あたいはね。男には興味が無いんだ。若くキレイな女のオマンコが好物なのさ」

中年女は上擦った声で言いながら、真由美の太腿を押し開いた。

「きれいな色だね。惚れ惚れするよ。匂いもいいね。シャワーでも浴びてきたのかい？味見させてもらうよ」

中年女が、真由美の股間に顔を押し込んだ。すぐにピチャピチャという厭らしい音が聞こえてきた。

「悪いが、あんまり時間が無いんだ」

「いいじゃないか。あんただって女達がちゃんと処分されるか見届けたいだろう？」

中年女が、愛液に濡れた顔を上げた。

「まあな」

「決まりだね。美味しい料理も食べさせてあげよ。先に死体を処分しないとね」

中年女は、テーブルから女を引き摺り下ろすようにして、床に立たせた。真由美は、身長が百七十センチくらいあり、百五十センチそこそこの中年女と並ぶと、滑稽な感じがした。

「大人しくしてないと、ブチ殺すよ」

中年女は、真由美の重たげな乳房を鷲掴みにし

ながら、空いている方の手で懐から取り出した黒光りするリボルバーの銃身を、真由美のアヌスに差し込んだ。真由美の盛り上がった白い尻が無残に震え出した。中年女は、後ろ手を拘束された真由美の黒髪を引きながら、隣室へと消え、すぐに戻って来た。

「あの女は、鎖に縛り付けてきたから大丈夫だよ。死体を持って付いてきな」

譲は死体が入った皮袋を背負い、中年女の後に続いた。

譲と中年女の二人は、ログハウスの地下に造られた巨大なプールの近くに立っていた。プールと

いっても水は濁り、底は見えなかった。腐敗臭がして息苦しいほどであった。

「ジヨン。飯の時間だよ。出ておいで」

中年女が、呼びかけると、目の前の水面が盛り上がり、巨大な黒い物体が浮き上がってきた。ワニだ。それもハメートル近くもあり、クロコダイル科に属するニルワニであった。人食いワニとして恐れられている凶暴な種類だ。

「どうしたんだい？ジヨン。いつもは浮き袋みたいに浮いているのに。このお兄さんが怖かったのかい？譲、ぼさつとしていないで、餌をやつてちようだいな」

譲は無言で、皮袋から取り出した死体を水面に



放り投げた。間髪を入れずナイルワニが巨大な口
で死体を挟み込んだ。死体とはいえ、美しい尻や
乳房ごと食われる様は刺激的であった。

「今日は食欲旺盛だね。同じ死体でも若い女が好きなんだろう」

中年女は目を細めて、ナイルワニの食事を眺めていた。譲と中年女は、クロコダイルが餌の女を食べ尽くすのを確認してから、居間に戻った。

「それでも飲んでいてくれ。テレビやビデオも自由に使っていていいよ。これから下拵えをするから」

中年女は、譲にジンのボトルとグラスを手渡した。

「氷は無いのか？」

「冷蔵庫に入っているから、適当に使っていいよ」

中年女は居間と繋がっているダイニングキッチンを指差してから、捕虜の女を監禁している隣室

へと消えた。

暫くして、真由美のものと思われる低い喘ぎ声
が聞こえてきた。譲は、食卓テーブルの椅子に腰
掛け、ジンを飲み始めた。

「最高だね。若い女のオマ*コは」

中年女はベッドに横たえられた真由美の股間を
覗き込んでいた。真由美は後ろ手を手錠で拘束さ
れているので、為すがままであった。空ろな視線
を天井に向けていた。

中年女はサーモンピンクの膾やクリトリスをし
やぶりながら、盛り上がった白い乳房を鷲掴みに
して揉みしだいた。手に吸い付くような滑らかな

肌を持っていた。今度は仰向けにひっくり返し、盛り上がった白い尻を鷲掴みにした。

「お尻もギツシリと肉が詰まっていて、美味しうだね」

満面の笑みを浮かべながら、頬擦りした。それから尻を両手で割って、割れ目を覗き込んだ。サーモンピンクのきれいなアヌスが息づいていた。

舐めてみた。部屋に付いているシャワーで丹念に洗ったので異臭はしなかった。

「肌も滑らかだよ。吸い付くようだ」

真由美の太腿に手を滑らせながら、上擦った声で独り言を言った。それから時間をかけて真由美の全身に舌や手で愛撫を加えた。それまで一言も

発しなかった真由美が、低い喘ぎ声を漏らし始めた。耐えられるものでは無かった。中年女は、女の弱点を知り尽くしていた。何時の間にか真由美は忘我の域を漂っていた。

中年女は、真由美にうつ伏せの姿勢を取らせ、着ていた衣服をすべて脱いだ。脂肪でだぶついた醜い裸身に極太のペニスバンドを着けていた。

泣きたくなるような美しい尻を抱いて、膣に押し込んだ。真由美が背筋を仰け反らせ鋭い喘ぎ声を上げた。真由美の盛り上がった白い尻に、何度も何度も股間を打ち付けた。

譲はジンを飲みながら、何時の間にか寝入って

いた。時折、女の鋭い喘ぎ声や啜り泣きの声が目
が覚めた。完全に目覚めることは無かった。暫く
して、中年女が全裸姿の真由美を厨房に引き摺る
ようにして連れて行くのが見えた。意識はそれで
途切れた。



中年女は、バスルームに真由美を連れ込み、バスタブに上半身を落し込んだ。目の前に据えられた美尻を割って、アヌスを剥き出しにさせ、舌で

48 舐めた。十分に湿らせてから、ホースを差込、温

水を注ぎ入れた。

数分後、限界に達した真由美のアヌスから、水流が噴出し、間髪を入れずに汚物がひじり出された。

「こんなにいい女でもウンチは臭いね」

側で食い入るように見詰めていた中年女が、楽しそうに笑った。水浣腸と排泄は、排泄物が透明になるまで続けられた。

真由美に浣腸を施した後、ボディソープとシャワーで洗い清め、キッチンに連れ込んだ。長さ二メートルはある特大の俎板に真由美を座らせた。

真由美は中年女による激しい陵辱のために意識が朦朧としていた。真由美の腕に注射器で薬物を

注入した。

「すぐに眠くなるよ。いい娘にしていたから楽に死なせてあげるね」

数秒後真由美は、意識を失い、俎板の上に横たわった。中年女が、刺身包丁を手にして真由美に近付いた。

譲は胃腸を刺激するような香ばしい匂いで目を覚ました。目の前に置かれたジンのボトルは空になっていた。隣に新しいボトルが置かれていた。周りには、様々な器に肉料理が盛られていた。

「あんた。チャカを握りながら眠っていたよ。本当におっかない男だね」

中年女は、讓のズボンからはみ出したベレッタの銃握を見詰めながら言った。

「癖なんだ。気にしないでくれ」

「さあ。京子姉さん自慢の手料理だよ。遠慮しないで食べてくれ。そうそうメインディッシュは今調理中だから、もう少し待っておくれ」

中年女が始めて自分の名を口にした。

「こいつは何だ？」

一番近くの料理を指差した。

「生肉をタルタルステーキのように叩いて、レモンとオリーブオイルと塩コショウで和えてみたんだ。ホッペが落ちそうになるくらい美味しいよ」

讓は肉片を箸で摘んで口に放り込んだ。途端に

これまで経験したことの無い味が口内に広がった。きらいな味では無かった。いや、かなり美味と言えた。

ジンを飲みながら、貪るように食べた。

「そっちはね、腿肉を細切りにして、色々な薬味や調味料で和えたものでね、ユツケのようなものだよ」

京子は説明した後で、肉料理に舌鼓をうった。目を細め、満足そうな笑みを浮かべた。

「何だい。これ全然臭みがないね」

京子は自分で調理しておきながら、驚いたように、箸で摘みあげた肉片を見詰めた。

「たぶん。果物や野菜を主食としていたんだね」

意味不明な独り言を呟いた。

「ああ。美味しいよ。ところで何の肉だ？」

譲が肉料理をつまみながら尋ねた。

「これはね。醤油、ゴマ油、刻みねぎ、おろしにんにくで和えたレバ刺しだよ。食べてごらん。やっぱり新鮮な生肉は最高だね」

京子はそれには答えず、他の料理について説明した。譲は勧められるままに箸を動かした。

「そろそろ、メインディッシュが仕上がったようだね」

京子は席を立ち、キッチンに消えた。すぐに、キャスターを押して戻って来た。何と、キャスターの上には、こんがりとキツネ色に焼き上げられ

た人間の尻が載せられていた。その隣の皿には、真由美の生首が立てられていた。死化粧を施された顔は、まるで生きてるように見えた。また、その隣には深底鍋が置かれていた。透明なスープの中に、タマネギやニンジンと、手足の断片が見え隠れしていた。

「これが肉の正体さ。驚いただろう？」

京子が譲の顔を覗き込むようにして言った。

「こっちは、死体を処分するのか？」

聞きながら、レバ刺しを一切れ口に放り込んだ。

「驚いたね。あんた平気なのかい？」

「人肉は初めてだ。これほどの美味とは思わなかった」

のんびりとした口調で答えた。

「以前、愛人を処分して欲しいという奴がいてね。同じように料理をふるまったことがあるのさ。そいつは、最初、愛人の肉とは知らないで、食べるよ。うに食べていたんだが、正体を教えたら、ゲロゲロと吐きやがってね」

「そいつはどうなった？」

「ドタマ撃ち抜いてジヨンの餌にしてやったよ。アタイの料理にゲロを吐いたんだからね」

「俺にもそうしたのか？」

「とんでもない！いくらアタイでもあんたには手を出さないよ」

京子は、真由美の尻肉を一切れ肉切り包丁で切り取り、皿に載せ譲の前に置いた。譲は肉汁がしたたるロースト肉をフォークは使わず、手掴みで口に入れた。感触を確かめたかった。口内で、すぐに肉汁が弾けた。絶妙の塩加減であった。肉質も柔らかく蕩けるようだ。食べながら、真由美の白い裸身を思い出していた。自分が犯し抜いた美しい肉体は、料理され自分の一部になろうとしていた。

「尻肉のローストは気に入ったかい？スープも飲みなよ」

譲は勧められるままに、スープを飲んだ。

「フルコースの仕上げだよ。脳味噌に卵の黄身と

糖蜜とレモン汁を混ぜて、フリーズさせてみたんだ」

京子は、真由美の顔を押さえ、毛髪を引つ張った。頭部が二つに割れ、調理された脳味噌が露になった。それを皿に取り、譲の前に置いた。

「若い女は本当に最高だね。身体で満足させてくれて、舌でも楽しませてくれるんだから」

第三章 人肉オークション

恵理は、円卓の上に全裸で横たえられていた。

薬でも盛られているのか意識は混濁していた。拉致されてから、一ヶ月間のことを思い出していた。

恵理はその夜、ひとりマンションで寝ていた。

深夜過ぎ、物音で目が覚めた。 気配を感じ、

起き上がるうとしたところ、口元を手で抑えられ、
すぐに猿轡を噛まされ、さらに後ろ手を手錠で拘
束された。明かりが点けられ、侵入者が明らかと
なった。二人の若い女であった。それもとびきり
美人の。二人は黒皮のロングコートを着ていた。

「最高の食材だね」

背の高い方が、恵理の乳房をパジャマの上から
揉みながら言った。

「騒いだりしたら、殺すからね」

グラマーな方が、黒光りする拳銃を恵理の腹に
押し当てながら耳元で囁くように言ってきた。恵
理は、猿轡を噛まされているので、頷くしか無か

った。

侵入者の二人は、パジャマの上にコートを着せ、外に連れ出した。猿轡は外されたが、ひとりの女に拳銃を突きつけられているので声を出すことはできなかった。

誰にも目撃されることなく、地下駐車場に停めてあった侵入者のワゴン者に乗せられた。車はすぐに発進した。ワゴン車の窓は厚いカーテンで覆われ、外部から中を覗くことはできなかった。後部の照明が点けられた。

「いや！止めて」

車内では、女が、恵理の衣服を脱がしにかかった。

「大人しくしないと。ぶち殺すよ」

恵理の鳩尾にパンチを食らわせた。恵理は呻き声を上げて動かなくなった。全身から力が抜けていた。コートと、上下のパジャマを一気に脱がされた。下着は着けていなかったので全裸姿で女の前に横たわった。

「いい身体しているよ。この女、顔も身体も極上品だね」

背の高い方の女が、恵理の股間を鷲掴みにしながら言った。

「もう止めて！」

恵理は顔を両手で押さえ、嗚咽を漏らした。女の指先が膣とアヌスに侵入してきた。内壁を指先

で擦られた。

「交代してよ！」

運転席のグラマーな女が、叫ぶように言った。

「いいからちゃんと前を向いてなよ。後で替わってあげるから。さあ。いい子ちゃんですね。小股を広げましょうね」

衣服を着た女が、恵理の太腿を持ち上げ、大きく左右に開いた。

「ふーむ。いい匂いだ。痺れちゃうよ。それに、きれいな色しているよ」

女の顔が恵理の股間に入ってきた。柔らかい舌先が膣やクリトリスを這い回っていた。理恵は基本的にには異性愛者であり、撮影のために友人の忍

と絡むこと以外に、同性との性的経験は無かった。拉致された恐怖感と、同性による騷りのために気も狂わんばかりであった。強烈な尿意を覚えていた。

「お願い……。おトイレに行かせて」

恵理が弱弱しく囁いた。

「小さい方かい？」

女の問いに対し、弱弱しく首を振った。

「ならここでしなよ。飲んであげるから」

女が、恵理の尻を両手で鷲掴みにして、尿道口に口を付けてきた。ジュルジュルと尿を吸い出そうとした。

「嫌！止めて!!」

恵理は、泣き叫んだ。激しい尿意のために、気がおかしくなりかけていた。

「あれを使ったら」

運転席の女が、笑いながら言ってきた。

「そうだね」

股間にいた女が離れた。バツクの中から、ビニール袋にパッキングされたゴム製のカテーテルとビニール製の手袋を取り出した。手袋をはめ、細い管状のカテーテルを、ビニールから取り出して、再び太腿を押し広げた。陰唇を広げられ、クリトリスと膣の間にある尿道口にカテーテルの先端を挿入された。

「嫌！」

恵理はあまりのおぞましい感触に、髪を振り乱し、身を仰け反らせ絶叫した。

女はカテーテルのもう一端を口に含み、静かに尿道口に押し込んできた。不意に尿意が和らいだ。女の喉がゴクゴクと鳴っていた。恵理は意識が朦朧としていた。ゆっくりとカテーテルを引き抜かれた。

「美味しかったよ。お前のオシッコは。また飲んであげるからね」

女は言いながら、再び股間に口を付けてきた。シートにくぐったりと横たわる恵理の膣やクリトリスを狂ったように舐め始めた。その後も、誘拐者の女達によって、交代でいたい放題に嬲られた。

車内には恵理の性器から漂う淫靡な性臭と、嗚咽と喘ぎ声が満ちていた。ワゴン車は二時間以上も走り続けた。恵理は、羊蹄山が木々の間から垣間見える山深い丘陵地に建てられた山荘に連れ込まれた。

その山荘で約一ヶ月の間、監禁された。山荘内では、常に全裸で過ごさなければならなかった。全裸であつても快適な気温と湿度に保たれていた。食べ物と言えば、果物に野菜と穀類だけであつた。監視役の女達によって、毎日ビール風呂に入れられ、全身をブラッシングされた。四六時中、その美しい女達によって嬲られた。いつしか快樂を受け入れるようになっていた。

何時間も膣やアヌスを舐られ、何度もいかされた。最後は極太のペニスバンドで貫かれた。失神するまで止められなかった。近頃では監視役の女達に自ら尻を向けるようになった。犯していただくのであった。

陵辱は山荘内のどこでも行われた。監視役の女達は気が向けば恵理を抱いた。膣が乾くことは無かった。

排泄ですら自らの意思で行うことはできなかった。決まった時間に浣腸され、透明なガラス張りトイレの中で、監視役の女に見られながら、しなければならなかった。

便の具合までチェックされた。ウォシユレット

を使った後に、監視役の女にトイレットペーパーで尻を拭かれた。アヌスの匂いを嗅がれ、指先を入れられ、きれいになったかどうかを確認された。人格というものは存在しなかった。

監視役の女達が食事をするときは、食器がわりで使用された。女体盛りというものであって、膣や太腿や腹の上に、果物や野菜を載せられ、ドレッシングを注ぎかけられた。女達はスティック状にした生のダイコンやニンジンをも、恵理の膣にし入れしてから味わった。

脱出は不可能であった。監視の目は厳しく、山荘の外に出されることも無かった。一度、逃走を試みたが、監視役の女に捕まり、激しい性的拷問

を受けた。

運動不足は地下に造られた屋内プールで解消させられた。

「今日の食肉は極上物ばかりですよ。四人の雌豚を用意させていただきました。一番から四番の番号札を付けておりますので、気に入った雌豚をお選び下さい」

聞き覚えのある女の声で、現実を引き戻された。意識が戻り始めた。女が言うとおり、女達の首にはベルトが巻かれ、番号札が付けられていた。

恵理は、隣に見知らぬ美しい女が、同様に全裸で横たわっていることに気付いた。

そこは、三十畳くらいの室内で、間接照明による柔らかな光で満たされていた。地下室なのであろうか窓は見当たらなかった。打ちっぱなしのコンクリート壁にフローリングの床となっていた。

周りには、スーツ姿の男が数人と、真紅のドレスを着た二十代後半くらいの美しい女が座っていた。彼らの背後に監視役の女がひとり立っていた。真紅のチャイナドレスに身を包み、彼らに笑顔を振り撒いていた。

「加納ちゃんは来ないのかい？」

五十代半ばに見える頭部が禿げ上がった中年男が、監視役の女に尋ねた。

「代表は、急用で来られません。皆様によろしく

お伝え下さいと申していました。本日は、私、弥生が皆様のお相手を勤めさせていただきます」

弥生と言う名だったのかと、恵理は心の中で呟いた。彼女達はお互いを番号で呼び合っていたからだ。

「弥生ちゃんというとおり、皆、美味しそうな身体をしているわね」

真紅のドレスを着た女が、弥生に微笑みかけた。

「一ヶ月の間。果物と野菜だけで飼育しましたから、肉質は保証します」

「あそこの具合はどうなんだ？」

先ほどの中年男が、卑猥な笑みを浮かべた。

「それは、これから皆様ご自身の手と口で確認し

ていただきます。では心行くまでお楽しみ下さい」
弥生が言い終わらぬうちに、女達の裸身に客達の手が群がった。惠理は、先ほどの中年男に裸身を弄られた。乾いた膣に指先を入れられた。何の遠慮も無かった。乳房を鷲掴みにされ、強く揉まれた。惠理はその中年男を生理的に受け付けられなかった。

「痛い……」

「いい声で泣きやがるぜ。こっちの具合はどうか
な」

中年男は嬉しそうに笑いながら、アヌスにも指先を入れてきた。節くれ立った指が体内で蠢いていた。

「雌豚は勝手に口を聞いてはだめよ」

恵理が弥生を睨み付けた。全身に慄きが走った。監視役の女には逆らえなかった。歯を食い縛り、屈辱感を必死に耐えていた。

中年男は、恵理の太腿を押し開き、顔を押し込み膣やクリトリスを舐り始めた。背筋に悪寒が走った。気持ちとは裏腹に感じ始めていた。中年男の愛撫は執拗を極めた。意識が薄れかけたころ、円卓がゆっくりと回り始めた。すぐに止められた。今度は、真紅のドレスを着た女の顔が近づいてきた。柔らかい唇を合わされ、舌を入れられた。女は、恵理の口を吸いながら、盛り上がった白い乳房を揉みしだいた。先ほどの中年男とは違って

ソフトな感覚だった。舌と唾液を存分に吸われた。女の顔が、唇を離れ、下に下がっていった。乳首を口に含まれ、優しく舌先で転がされた。自然に喘ぎ声を漏らしていた。さらに女の顔は下にさがり、今度はクリトリスを舐られた。

もう限界だった。クリトリスを吸われながら、膣とアヌスに指先を入れ、かき回された。悪寒のような快感が走り抜けた。

「ああ……。いい……。逝っちゃおう！」

恵理は全身を震わせ、透明な潮を吹いた。女が、尿道口に口を付けて、愛液と小水が交じった液体を喉に流し込んだ。

「この娘気に入ったわ」

女は妖艶な笑みを浮かべ、弥生に話し掛けた。

「北条様。さすがは、御目が高い」

近くに立っていた弥生が答えた。

「俺もその女を狙っているんだがね」

先ほどの中年男が、別の女の膺を指先で掻き回

しながら、会話に加わってきた。

「オークションで決着を付けましょう」

「望むところだ」

その後、恵理は二人の男に全身を蹴られた。穴

という穴を指先や口で蹴られた。さすがに男根を

挿入されることは無かったが、先ほどの女の場合

と違って、男達の扱いは荒々しく、恵理は身を引

き裂かれる恐怖と苦痛のために泣き叫んでいた。

「そろそろオークションを開始します」

弥生の声で、女達は鬨りから解放された。皆、

呆然とした表情を浮かべ、肩で息をしていた。咽

び泣いている者も見られた。

「皆様、ご用意いただいた値札をこの箱に入れて

ください」

弥生は小箱を持つて、客達の間を回った。

「さて、結果をご報告します。一番を手中にされ

た幸運の持ち主は、北条様貴女です！」

真紅のドレスを着た女が、満面の笑みを浮かべ

ながら立ち上がり、恵理に近付いてきた。

「お前は私の物よ」

恵理の乳房を触りながら耳打ちをして、そのま

まドアから出て行った。恵理は、混濁した意識の中、買主が例の中年男でなかったことに安堵の気持ちを抱いていた。

第四章 逃走

監視役の女を処分し、武器を手に入れた譲は、京子が運転する軽トラックに送られ、ホテルへと戻った。フロントがある一階のロビーを見渡した。黒皮のロングコートを着てサングラスを掛けた女達の姿を見かけた。どうやら、このホテルにも長居は無用のようであった。

弟夫婦と譲の部屋であり最上階に位置するロイヤルスイートルームのドアをノックした。

「俺だよ。ドアを開けてくれ」

「兄さん！今開けるよ」

部屋では、諒と忍の二人に迎えられた。譲はソファテーブルに武器弾薬が詰まったボストンバッグを載せ、黒皮製ロングコートを脱いだ。

「お帰りなさい」

忍が、部屋に備え付けのポットで熱いコーヒーを煎れてくれた。

「有難う。忍ちゃんは良く気がきくよ」

譲はTシャツにミニスカート姿の忍に目を細めた。

「どうしちゃったのかしら。私、昨夜からの記憶が無いのよ」

「忍ちゃん。過労だよ。色々あったからな。神経の使いすぎさ。気持ちよさそうに寝ていたよ」

譲が舌を火傷しそうに熱いコーヒーを啜りながら答えた。

「これからどうするんだ？」

諒が思い詰めたような顔で言った。

「明日、ホテルを出る。ここにも奴らの手が伸びているようだ」

「何処に行くの？」

忍が零れ落ちそうな大きな瞳で譲を見詰めた。

「わからない。正直言つて、奴らの組織力がどの程度のものかわからないんだ。逃げ場所は無いかも知らない」

「彼ら私をどうするつもりなのかしら」

忍が小首を傾げながら呟いた。

「世界中に人身売買組織が存在する。そこでは若い女が性交奴隷として売買されている」

「兄貴。もういいよ。止めてくれ。忍が怖がるじゃないか」

「いいのよ。諒。私、知りたいの」

「しかし、性交奴隷としてひとり二千万は高すぎる。そんな話は聞いたことが無い」

「逃げ場が無いとしたら……。私彼らのもとに行くわ」

「何言ってるんだ！」

諒が叫ぶように言った。

「だって。彼らが狙っているのは私なのよ。貴方達じゃないわ」

忍の肩先が小さく震えていた。

「最初はそうだった。だが、今は状況がかわっている。俺達は知りすぎたようだ。忍ちゃんを拉致しようとする目的は不明だが、俺と諒が命を狙われているのは確かだ」

「どうすればいいの？」

「これから考える。まずは飯だ。ルームサービスを頼むから、食事が来るまで二人は奥の部屋で休むといい。それと俺が来ていいというまでこっちは来るな」

二人が奥の部屋に消えてから、譲は全裸になり、

バスルームに入った。シャワーを浴びて、バスロ
ーブに着替え、フロントに夕食のルームサービス
を注文した。それからボストンバックを開け、中
から銃器と弾薬を取り出し、テーブルの上に並べ
た。手榴弾二発を黒皮製のロングコートのポケッ
トに入れた。

レイジングブルに四五四カスール弾を装弾し、
テーブルの上に置き、雑誌を載せた。予備弾と
二発の手榴弾をウエストポーチに入れた。デザー
トイーグルとイングラムに装弾し、ボストンバッ
クに戻した。さらに敵から奪ったシグサワーP二
二〇をソファの下に隠した。部屋を急襲されたと
きの用心のためであった。

その時、ドアがノックされた。

「食事をお持ちしました」

若い女の声がドアの外から聞こえてきた。譲はソファに置いておいたロングコートの内ポケットからベレッタを取り出し、背後に隠し、ドアを静かに開けた。ホテルの制服を着た三人の若い女達が、料理を載せたキャスター付きテーブルの近くに立っていた。三人ともすこぶる付きの美女であった。

「どうぞ」

譲が道を開けた。三人の女達が、譲の横を通り過ぎようとしたその時、ひとりが譲の股間を蹴り上げた。寸前のところで、手刀でブロックした。

手が痺れるくらいに強烈な蹴りであった。反動でベレッタを床に落としてしまった。間髪を入れずに、もうひとりが、回し蹴りを譲の首目掛けて放ってきた。上体を低くし、難を逃れた。

女達の連続技は見事なものであった。譲に反撃する暇を与えなかった。ひとりに背後から、抱きつかれ両腕を掴まれた。バスローブの前がはだけて男根が剥き出しとなった。前にいた女が男根を蹴り上げてきた。見事に決まり、譲の意識が薄れ掛けた。女は鳩尾にも重たいパンチを放ってきた。背後の女が譲に手錠を掛けた。

「握り潰してやんなよ」

背後の女が声を掛けてきた。

「その前に楽しもうよ。輸送チームが来るのは、明日なんだから」

前の女が、両手で譲の男根と睾丸を弄びながら答えた。

「そうだね。こいつ中々いい男だしね。後続チームに連絡するよ」

背後にいた女が、譲のアヌスに指先を入れながら、もう一方の手でレシーバを取り出した。

「今、ひとりを捕獲した。残りも奥にいるわ。こっちに来て手伝って」

すぐに、後続チームが到着した。こちらもふたりの若い女であった。ふたりは、拳銃をかまえないが、奥に向かった。

「キヤー！」

奥の部屋から忍の叫び声が聞こえてきた。全裸に剥かれた譲と諒と忍の三人が、奥にあるベッドルームのダブルベッドの上に横たえられていた。譲と諒は上向けに寝かされ、全裸姿の女に男根をしゃぶられていた。ふたりとも後ろ手を手錠で拘束されていた。譲も諒も既に何度か口でいかされていた。ふたりにフェラチオをしている女達は、ペニスバンドを装着していた。

忍は、女の顔の上に四つん這いの姿勢を取らせ、膣を舐められていた。もうひとりの女が、背後から尻の割れ目に顔を入れ、アヌスを舐っていた。忍は、しきりに鋭い喘ぎ声をあげていた。二

人の同性に犯される屈辱感と、爛れる様な快感に
気がおかしくなりかけていた。



譲と諒は、今度は、うつ伏せに寝かされた。腰
を上げるように強制され、女達の方に尻を突き出

す格好にされた。

ふたりの女達は、譲と諒の後ろに座り、片手で尻を叩きながら、もう一方の手を使い、乳絞りの要領で男根を絞りあげた。

諒が先に、女の手の中に放った。女は美味しそうに手の平を舐めた。今度は諒の尻を割って、顔を押し付け、アヌスを舐り始めた。女の巧みな舌技に諒が喘ぎ声を漏らした。暫くアヌスを舐った後で、諒に背後から載りかかった。

「ギャー！」

諒のアヌスにペニスバンドの男根部分が突き込まれた。女は苦痛に身悶えする諒の男根を扱きながら、腰を前後左右に激しく振った。

忍は女二人にサンドイッチにされて、膣とアヌをペニスバンドの男根部分で貫かれていた。背後の女に乳房を揉みしだから、前の女に舌をしゃぶられ、何度も何度も突き上げられていた。忍は何度もいかされていた。無限とも言える快感地獄の中を漂っていた。喘ぎ声が高くなっていった。再び達しようとしていた。

譲と諒は、ペニスバンドでアヌスを貫かれた後で、バスタブに連れて行かれた。二人は、床に仰向けの姿勢で横たえられた。女達は、ふたりの顔に跨り次々と放尿を始めた。鼻や口に容赦なく小便を注ぎ込まれた。二人の女達が、意識が朦朧としていた忍を両側から抱き抱えるようにしてやっ

てきた。

もうひとりの女が、大股を開かれるようにして抱き抱えられている忍の尿道口にカテーテルを差込んだ。

「嫌！」

忍は、苦痛と、あまりのおぞましさで絶叫を上げた。カテーテルのもう一端から小水が流れ出した。譲と諒は、口を開けられ、それを飲まされた。

陵辱はそれで終わらなかった。まず、始めに諒が犠牲者となった。女達は忍を諒の顔に跨らせ、さらに口に膣を押し付けさせて窒息させた。

「お願い。止めて。許して」

忍は、涙声で女達に懇願した。聞き入られる筈

も無かった。諒はあまりの苦しさに失禁した。剥き出しにされた男根から小水が噴出した。

女達は、笑いながら、諒の男根や睾丸を素手で殴りつけた。諒が失神した後で、讓が同様の責めを受け、同じように意識を失った。

女達は失神した二人に冷水を浴びせて意識を回復させた。一人をうつ伏せにして、尻を上げさせ、アヌスに指先を挿入した。最初一本であったが二本、三本と入れていき、最後には手首まで、アヌスに捻り込んだ。

二人の苦痛に満ちた絶叫がバスタブに満ちた。女達は交代で、ふたりのアヌスを素手で貫いた。アヌスから出血しても止めようとはなかった。殺

しを前提とした鬻りが、延々と続けられた。

五人の女達による陵辱は深夜にまで及んでいた。場所をかえて居間で行われていた。床に横たえた忍の全身を四人の女達が、舌や手を使って鬻っていた。

忍は度重なる陵辱のために、力尽き意識を失っていた。女達は人形のような忍の白い裸身を弄んだ。

一方、譲と諒はひとりの女に仕えされていた。全裸の女は、赤ワインを飲みながら、ソファに腰掛、側に立たせた諒の男根を手で扱っていた。譲は床に膝を付き、女の膺を舐めていた。

「もっと気を入れてやんなよ。金玉潰すよ」

讓の顔を蹴った。讓はもんどりうって床に倒れた。そのとき讓の鋼のような全身が動いた。後ろ手に手錠を掛けられた状態で、ソファの下に両手を伸ばした。

手錠を掛けられた手で、ソファの下に隠しておいたシグサワーP二二〇を取り出し、目の前の女に向けて発砲した。女の眉間に小さな穴が開き、後頭部から血と脳漿が噴出し、白壁を真っ赤に染め上げた。

間髪を入れず、床で忍を髑っている女達に向けて、後ろ手を手錠で拘束されているので、身を捻るようにして引き金を絞り続けた。連射音と女達の絶叫が室内に交差した。

五人の女達のうち、四人は頭部や心臓を貫かれ即死状態であった。ひとりは銃弾が頭部を掠っただけだったが、意識を失っていた。

ロイヤルスイートルームは最上階にあり、防音対策も万全で、外に銃声が漏れることは無かった。

譲は、諒に女達のバックから手錠の鍵を取らせ、手錠を解かせた。譲は頭から血を流し意識を失っている女を抱いて、バスルームに消えた。

「この淫売が。いつまで眠っていやがる！」

譲は、女に冷水を浴びせて意識を戻させた。女の顔の近くで仁王立ちになって、小便をかけた。

女が苦しそうに喘いでいた。

女の顔に小便をかけた後で、今度は女をうつ伏

せにして、乾いたアヌスに手首をめり込ませて行った。女は全身を震わせ、絶叫を放った。アヌスが裂けて出血するのもかまわず、大きな拳を出し入れした。

譲は、女の盛り上がった白い尻が、自分の拳で犯されているのを見て、再び男根が熱くなるのを感じた。

水が張られている浴槽に女の上半身を落とし、頭部を水中に押さえつけ、膣に男根を挿入した。女は、息苦しさのあまり、手足をばたつかせた。

譲はかまわず、両手で女の頭を水中に固定し、剥き卵のような白い尻に腰を打ち付け続けた。

女の動きが次第に小さくなっていき、最後には

物凄い力で膣が男根を締め上げた。死線期の痙攣を起こしていた。譲は獣のような咆哮を上げ、膣内に放出した。絶命した女の全身を浴槽の中に落とし込んだ。女は死の間際、苦しさのあまり、失禁と脱糞を繰り返していた。シャワーとボディソープで汚物を洗い流し、バスルームを出た。

居間に戻り、女達の死体を集め、バスルームに運んだ。諒は失神から覚めた忍の介抱をしていた。

「忍ちゃんに服を着せるんだ！早くしろ」

「どうするんだ？」

「此処は奴らに占拠されたようだ。強行突破する」

「無理だよ。忍がこんな状態じゃ」

諒が言うように忍は長時間に渡る陵辱のために、

疲労困憊の状態にあった。自分で立つことももどかしげであった。

「わかった。忍ちゃんは俺が担いでいく」

八十キロ以上の荷物を背負い、山野を走り回っていた譲にとつてはたやすいことであった。それに最悪の場合、弾除けに使おうと考えていた。

「忍は俺が背負う」

「お前には無理だ。足でまといになるぞ」

「……わかった。兄貴に頼むしかなさそうだ」

譲は衣服を身に付け、レイジングブルを前のベルトに挟み、ウエストポーチを腰に固定した。黒皮のロングコートを羽織った。

床に横たわっている全裸の忍を背中に背負った。譲は密かに忍の素肌の感触を楽しんでいた。豊かな乳房が背中に当たる感触が堪らなかった。諒が忍にロングコートを羽織らせた。その上から紐で譲の背中に固定させた。

譲は、武器が詰められているボストンバックから、イングラムと手榴弾を一発取り出して、安全ピンを外した。

「諒。こいつを持っていけ。引き金を引けば弾が出る」

譲はシグサワーP二二〇を諒に手渡した。

出口近くにあるバスルームのドアを開けて、手榴弾を放り投げ、再びドアを閉めて、室外に飛び

出した。諒が後に続いた。

二人が室外に出たとき、轟音がしてホテル全体が揺れた。バスルーム内の手榴弾が爆発したのであった。バスルームの壁と床は固い大理石に覆われ、気密構造となっているので、手榴弾の威力は倍加する。女達の死体をまとめて挽肉にしてくれる筈であった。

讓がイングラムの引き金を引き絞った。毎分千発の速度で、四十五ミリオートが吐き出さされている。前方の人影が死のダンスを踊っていた。床に倒れ伏したときは既に死亡していた。死んでいたのは見張り役の女達であった。それぞれが、自動拳銃を手にしていた。

背後から足音が近付いてきた。譲はロングコー
トのポケットから手榴弾を取り出し、安全ピンを
外し、後方に滑らせた。

「キヤー！」

女の悲鳴が聞こえ、続いて爆音と閃光が背後か
ら襲いかかった。三人は衝撃で床を転がった。譲
は忍を背負いながらもすぐに立ち上がった。諒も
何とか立ち上がり、歩き出した。爆心が遠いせい
かひとりも怪我をしていなかった。

地下の駐車場へは、エレベータを使わず、階段
で降りた。途中敵と鉢合わせをすることは無く、
駐車場に停めてあったランクルに乗りホテルを後

にした。

翌日、譲と弟夫婦が乗ったランクルは、山間の道道を東に向かって進んでいた。朝から続いていた吹雪が止み、嘘のように清んだ青空が広がっていた。追跡者の影は今のところ見えなかった。

樹海の中にできた道道を暫く進むと、通行止めのゲートで行く先を塞がれた。

道路脇に工事事務所が見えた。工事事務所の敷地内には数台の除雪車が止まっていた。敷地内に人影が見えたので、譲達は抜け道を聞くために、車を乗り入れた。

譲は、弟夫婦を車に残し、プレハブ二階立ての

事務所に入った。中には事務机が五卓並べられ、種類が散乱していた。男がひとり、席に付き書類に目を通していた。

「済みません。道をお尋ねしたいのですが」

その男に声をかけた。

「なんだい。あんた？」

先ほどの見るからに人相の悪い中年男が、近づいてきた。胡散臭そうな目付きで、譲を見上げた。

「阿寒町に行きたいんですけど、通行止めで足止め状態です。近くに抜け道はありませんか？」

そのとき、出口のドアが開き、作業着姿の若い男が入ってきて、中年男に耳打ちをし、再び出て行った。

「外は寒かったろう。こっちに来なよ。暖かいから」

中年男は急に愛想が良くなり、灯油ストーブ近くのソファセットに座るように勧めてきた。譲は勧められるままソファに腰かけた。

「今、コーヒーを炒れるよ」

中年男が事務所の奥に向かった。少しして譲は背後に殺気を感じた。横飛びでソファから離れた。座っていた場所にボールが叩き付けられた。譲は、ボールを再び振り上げた中年男の股間を蹴り上げた。中年男はボールを投げ捨て股間を抑えながら床でのたうち回った。

「何の真似だ？」

譲が、八十キロ以上はある中年男の襟首を掴み上げ、今度は壁に投げ付けた。中年男は背中から壁に激突し、床に頭から落ちて動かなくなった。譲は急ぎ足で外に出て、ランクルが止められている屋外の駐車場に向かった。

車内に人影は無かった。その時、工事事務所の隣に建てられたプレハブ小屋から女の悲鳴が聞こえてきた。

小屋の前に、譲が頭から血を流し倒れていた。手首を取って脈を調べてみたが正常であった。意識を失っているだけであった。

「どうした譲？」

譲の上半体を起こして、揺さぶった。

「あ……兄貴か。忍が奴らに……」

意識が戻った諒が、弱々しげに言った。言い終えると再び意識を失った。

譲は諒を肩に担ぎ、プレハブ小屋のドアを開けた。タバコの煙と強烈なアルコール臭が噴出した。二十畳ほどの室内には、三十人ほどの男達が、全裸に剥かれた忍を取り囲むようにして車座になっていた。皆、下半身を剥き出しにして、コップ酒を口にしながら、自らを扱っていた。

忍の白い裸身は、三人の男達に絡め取られていた。男達は横たわる忍の膺と尻と乳房に喰らいつき、貪るように舐めていた。忍は髪を振り乱し泣き叫んでいた。

「何だ。てめえは！」

男達のひとりが、諒を肩に担いだ讓に気付き、罵声を上げた。残りの男達が一斉に立ち上がった。男達の顔は、極上の楽しみを中断された怒りに満ちていた。

「お前からこそ。可愛い義妹に手を出して、ただで済むと思っっているのか」

讓が、肩に担いでいた諒を床に降ろしながら、落ち着いた口調で言った。男達が一斉に動いた。手にハンマーやバール等の得物を持って、讓に殺到した。

讓の手足が目まぐるしいほどに動き、近づく男達の股間や鳩尾や喉元を突いた。何人もの男達が、

一発で床に沈んだ。背中から絡み付いてきた男は、背負い投げで床に頭から叩きつけた。前方から飛びついて来た男は、両腕を掴み、そのまま壁に叩きつけた。

多人数とは言え、所詮は素人の集団であつた。数分で、室内には譲以外誰も立っている者はいなかつた。三十人あまりの屈強な男達を一瞬で眠らせる譲の技は通常のものでは無かつた。

譲は忍を陵辱していた男達の三人を床に並べ、剥き出しになっていた男根を足で踏み潰していった。男達が上げる絶叫が室内に響いた。

その時、ドアが開けられ、工事事務所にいた中年男が、懐からトカレフを出して譲に狙いを付け

た。

引き金を引こうとした瞬間に、気配を感じた譲が体勢を低くしながら、ベルトに差していたレイジングブル四五カスールを抜いて引き金を絞った。

轟音が鳴り響き、トカレフを持っていた手首に着弾し、千切れ飛んだ。中年男は絶叫を上げながら、手首の無い腕を押さえ床を転がった。

「お前のために皆、死ななきゃならなくなっただやないか」

譲はレイジングブルから、皮コートのポケットに入れておいたベレッタ九二FSに替えて、その

男の頭部を撃ち抜いた。

それから先は単なる虐殺だった。次から次へと、顔色ひとつ変えず、床に伸びている男達の眉間を撃ち抜いていった。マガジンを交換し、残りの男達すべてを撃ち殺した。部屋の隅で忍が啞然とした表情でそれを見ていた。あまりの残酷さに声が出なかった。

「大丈夫か。忍ちゃん？」

譲が何事も無かったように忍に近付いた。全裸姿の忍を見る譲の瞳が、欲情に濡れていた。

「嫌！近付かないで」

忍は、豊満な白い乳房を両手で隠し、泣き叫んだ。

「冷たいな。敵をとってやったのに」

抗う忍の裸身を両手で抱えあげた。ホテルで女達に嬲られる忍の白い裸身が脳裏をよぎった。バスルームで、忍の股間で窒息しかけた時の膣の感触が、今も唇に残っていた。抱いたまま、両手で抗う忍の盛り上がった白い乳房に喰らいつき音を立てて舐った。譲は忍のことを以前から狙っていた。極上の裸身を見せつけられては、我慢することなど出来なかった。

そのまま、床で意識を失っている諒を残し、小屋を出て工事事務所に入った。忍をソファに横たえ、むっちりとした形の良い太腿を押し開き、

膣に口を付けた。密かに想いを寄せていた女の膣は、眩暈を覚えるほどに甘く甘美なものであった。顔を両手で押さえ泣きじゃくる忍の膣やクリトリスを舐め捲くつた。

今度は裏返しにして、剥き卵のように白くすべすべの尻に頬擦りをし、両手で尻を割って、顔を押し付けた。きれいな色をしたアヌスの匂いを十分に嗅いだ後で、舌で舐り始めた。最高に美味しかった。興奮のあまり脳が破裂しそうなほどであった。

我慢も限界であった。もどかしい手付きでズボンとパンツを脱ぎ捨て、禍々しいほどに反り上がったペニスを背後から忍の膣に挿入した。

「嫌！」

忍が絶叫しながら、背筋を仰け反らせた。譲はかまわず腰を前後左右に、捏ねくり回す様に動きました。忍は名器の持ち主であった。締め付け感がたまらなかった。重たげな乳房とクリトリスを指先で刺激しながら突きまくった。

忍の泣き声がいっしか喘ぎ声にかわっていた。義兄に、獣のように犯されながら感じ始めていた。譲が忍の首を回し、唇に吸い付いた。忍は、譲に柔らかい舌を与えた。忍が落ちた瞬間であった。

「おおお……！」

譲の動きがいっそう激しくなった。獣のような咆哮を上げ、忍の膣に放った。

「いいいい……。逝っちゃう！」

続いて忍も全身を仰け反らせ、絶頂に達した。

その後二時間あまり、譲は忍を責めあげた。正常位で舌をしゃぶりながら膣に欲望を放出した。

忍の口内にも放し、それを強引に飲み込ませた。

譲は、放出後、再び勃起するまで、忍の全身を舐めあげた。膣内やアヌスにも舌先を押し込み存分に味わった。

二時間後、譲は意識が戻らない諒と、譲に犯され続け意識が朦朧としている忍をランクルに乗せた。工事事務所と、遺体が散乱するプレハブ小屋に、ガソリンを撒いて火を付けた。晴れ渡った冬空に、黒煙が舞い上がった。証拠隠滅のためであ

った。男達を撃ち殺したベレッタ九二FSは、死体に握らせておいた。かわりに男が持っていたトカレフを頂いた。近頃、裏社会に出回っている中国製の粗悪品ではなく、旧ソ連製の優れたものであった。

燃え盛る工事事務所を背にしてランクルを発進させ、元来た道を戻り始めた。

「一号いや沙織。この失態をどう言い逃れするつもりかね？」

札幌市内にあるビルの薄暗い地下室で、人肉売買組織を牛耳る加納圭吾と若い女が向き合っていた。サングラスをかけ、ダークスーツに身を包ん

だ加納は、深々としたイタリア製のひとり掛けソファに座り、沙織はフローリングの床に立たされていた。沙織ははち切れんばかりの肢体を真紅のチャイナドレスに包んでいた。沙織は捕獲チームのリーダー役であった。

「申し訳ございません。予期せぬ妨害がありました。しかし、奴らの車にビーコンを仕込んでいます。何処に逃げても捕まえてみます」

沙織の肩先が小さく震えていた。

「片桐譲のことか。糞忌々しい野郎だ。あいつのお蔭で億単位の商談がぶち壊した。しかし、いかなる理由があろうと失態は許されない。一度でもだ。お前達には十分すぎるほどの警沢をさせてい

る。金のことだけではないぞ。好みの男も女も好き
きなだけ与えている。沙織。権利には、責任が伴
うのだよ。肉になる覚悟はできているか？」

加納が淡々とした口調で言った。

「……はい」

肉になれと言われて頷くしか無かった。逃走を
試みても無駄なことであつた。

沙織達実動班は、二十代の若く美しい女達で構
成されていた。皆、格闘技や銃のエキスパートで
あつた。食事は果物や野菜が主であり肉質は最良
の状態に保たれていた。失態を犯したときに調理
され食われる運命だつた。

加納がゆっくりとした動作で立ち上がった。長

身ですらりとした体格の持ち主であった。沙織の横に立ち、沙織の重たげな乳房を揉みながら耳朶を舐った。

「行きなさい。お前の仲間達が待っている。肉になる前に彼女達の欲望を満たすのだ。そうだ。どうやって調理されたい？生がいいか？それともじつくりとローストされたいのか？」

加納の冷たい笑い声が室内に響き渡った。

そのビルにある地下の別室では、十人あまりの女達が、沙織を迎えた。皆全裸で、はち切れんばかりの肉体にペニスバンドを嵌めていた。

「一号。遅かったね。待ちくたびれたじゃないか。

そうそう、今日から私が一号だけど」

沙織に代わりチームの指揮を取る事になった二号が、意地の悪そうな笑みを浮かべた。女達は名前では無く、番号で呼び合っていた。

「……」

沙織は何も言わず俯いたままだ。

「二号。いや一号早く、沙織を剥いちまおうよ」

他の者が囁し立てるように言った。皆、興奮のために目を輝かせていた。

「そうだね。あたかも沙織のオマ＊コが見たくてうずうずしているのさ」

一号が、沙織に近付きチャイナドレスの襟元を掴んで一気に引き裂いた。ブラジャーとパンティ

を筆り取った。

「惚れ惚れするようないい身体をしているね。この締めまり具合も最高だよ」

一号が、剥き出しにされた沙織の膣に指を入れた。
てきた。

「こつちも最高に締め付けるわ」

別の女が、沙織の背後に回り、アヌスに指先を入れた。沙織の体内で二本の指が妖しく蠢いていた。

「もう許して!!」

沙織が、嗚咽を漏らし始めた。

「何言っているんだい。お楽しみはこれからだよ。

さあ、前屈みになるんだ」

一号が沙織の黒髪を掴み、立ったまま前屈みの状態にさせた。豊満でしみひとつない美尻が、皆の視線を釘付けにした。

「いいケツしているよ。こいつは」

沙織はみな視線を痛いほどに感じていた。

「早く、ぶち込もうよ！」

他の女が、ペニスバンドの男根部分を扱きながら叫ぶように言った。

「焦るんじゃないよ。まずは舌で楽しまなきゃね」

一号が沙織の背後で腰を屈め、目の前の美尻に両手を添えた。両手で尻を割り剥き出しにさせたアヌスに舌先を押し付けた。

「あああ……」

電撃が沙織の背筋を貫いた。

「そんなにいいのかい？むぐ……」

今度は激しい勢いで舐めてきた。クリトリスや膣も指先で弄られた。他の女にも重たげな乳房を揉みしだかれた。唇に吸い付かれ、舌をしゃぶられた。

昨日まで部下であった女達に嬲られる屈辱感とは裏腹に痺れるような快感が、全身に伝わった。立っているのがやっとだった。

「テーブルに載せるよ」

一号が沙織の手を引いて、ソファテーブルに上体を横たえさせた。テーブルから垂れた形の良い両足の間に入って、剥き出しにされた膣に口を付

けた。

「いいいい……」

耐えられるものでは無かった。女達の手や舌が、乳房や太腿や尻を這い回っていた。一号が沙織の両足を持ち上げ、膣にペニスバンドの男根部分を挿入してきた。

「あああ……。いい！」

思わず鋭い喘ぎ声をあげていた。一号の背中に手を回し、引き寄せた。望まれるままに舌を与えた。一号が腰を使いながら、アヌスに指先を忍び込ませてきた。

「駄目。そこは……。あああ……。いつちゃう！」

沙織は二人の女達に両脇を抱えられながら、全裸姿で調理室へと連れて行かれた。女達は大胆なスリットを持つ真紅のチャイナドレスに身を包んでいた。

女達による陵辱の後で、大量の浣腸を施され意識が朦朧としていた。

「ほう。今日の食材は最高級じゃねえか」

女達の前に、身長二メートル以上はある調理長の陳が立っていた。分厚い胸板、きれいに剃り上げられた頭部に残忍な光を持つ小さな目を持っていた。レスラーあがりのような体格を調理服に包んでいた。

「陳さん。沙織の肉で何を作るの？」

女達のうちのひとりが、沙織の重たげな乳房を揉みながら言った。

「加納さんからの命令で、全身を蒸し焼きにするんだ。お前達も不手際をおこしたら調理してやるからな」

「縁起でも無いこといわないでよ」

「他の人はどうしたの？」

「帰したよ。俺ひとりで調理するつもりさ。こない女、他の奴に捌かせるのはもったいないかな。十分に楽しませてもらうよ」

陳は両手で軽々と沙織を抱き上げ、調理台の上に横たえた。

「じゃあ。後はよろしくね。行きましよう。二号」

女達が出て行った後で、陳は沙織の太腿を押し広げ、膺やアヌスの匂いを嗅いだ。洗浄は完璧のようだった。舌で舐めてみた。味も申し分ない。質感を味わうかのように寝ても崩れない重たげな乳房に頬擦りをした。両手で乳房を掴み上げゆつくりと揉みしだいた。

「美味しく料理してやるからな」

陳が沙織の髪を掴んで、喉に刺身包丁を当てた。

「お願い。殺さないで……」

沙織が弱弱しく囁いた。陳に答えるつもりなど毛頭無かった。沙織はただの肉に過ぎなかった。

「ギャー！」

鮮血が迸り、陳の調理服を真っ赤に染め上げた。

調理台の上で身悶えしていた沙織の動きが緩慢になり、やがて、ビクリとも動かなくなった。沙織の全身にホースで水をかけ、血を洗い流した。切り口に別のホースを差込み、調理台横についていたスイッチを押した。ゴボゴボという音がして、体内に残っていた血液を吸い出した。血抜きは二、三分で終了した。次に、調理台の引き出しから、二メートルくらいの電線が繋がった筒状の体温計を取り出した。それを沙織のアヌスに深々と差込んだ。

「これでよしと」

独り言を呟き、調理台の下から透明で、巨大なビニール製の袋を取り出して沙織の裸身を入れた。

体温計に繋がった電線は袋から外に引き出した。
香味であるフォンサージュや様々な調味料を加えた油を中にたっぷりと注ぎ込んだ。

沙織を入れた袋を持ち上げて、調理台の横に置かれたチャンバーと呼ばれる真空調理に使う真空包装器の上に上げた。

袋の口がシール溶接部に確実に固定されていることと、体温計に繋がっているケーブルが外に出ていることを確認しながら、チャンバーの蓋を閉めた。

ウイーンというモータ音がして、チャンバー内と瞳を入れた袋の中の空気を外に排出していった。真空処理を終えた後、大人一人が入れくらの

特注スチームオーブンに押し込んだ。体温計のケ
ーブルの端をオーブンのフロントパネルに差し込
んだ。

オーブンのフロントパネルで温度を五十四、
加熱時間を九十分に設定した。食材の温度は、肛
門に入れた体温計で把握することができた。

その夜、ビルの地下にある会議室に組織の重役
が集められ、緊急会議が行われた。譲達を捕獲す
るために起こしたホテルでの銃撃戦の隠蔽工作や、
今後の捕獲計画について熱心な議論が交わされた。
会議の進行は代表の加納が自ら行っていた。

会議終了後、場所をビルの最上階にある会員制

レストランに移し、夕食会が開催された。十人掛けの広大ともいえる円卓には、加納と9名の重役達が席に着いていた。加納以外はすべて初老の中国人であった。女性の姿は見当たらなかった。三百坪ほどのフロアには加納達と給仕の姿しか見えなかった。

加納がシャンパングラスを持って、立ち上がった。背景の巨大な窓ガラスからススキノの夜景が見えた。

「皆さん。本日は大変ご苦労様でした。今宵は特別料理を用意していますので、心行くまでお楽しみください。では組織の今後の繁栄を願って。乾

杯！」

そのとき扉が開けられ、調理長の陳が、キャスタ―付きテーブルを押して現れた。その上には、透明な大きな袋が載せられていた。袋の中に全裸の女体が見えた。陳が、それをテーブルに載せて、ナイフで袋を裂き始めた。裂き口から蒸気とともに、香味料の芳醇な香りが噴出し、室内に広がっていった。

「素晴らしいできだな」

加納が、深い溜息をついた。袋から出された沙織の裸身は、多少は赤みがかったが、十分に瑞々しさを保っていた。顔も生前の美しさを保ち、目は閉じているが、まるで生きているかのようであった。調理された沙織の肉体は、大皿の上にな

つ伏せに横たえられた。周囲にトマトやレタス等の野菜が盛り付けられた。

「どの部位から食しますか？」

陳は加納に問い掛けた。

「尻だ。尻肉を食べたい」

加納はワイングラスを弄びながら、目の前の盛り上がった尻を食い入るように見詰めていた。

「かしこまりました」

陳はうつ伏せになった瞳の尻に、刺身包丁で切り込みを入れた。切り口面からジューシな香りが沸きあがった。断面は全面がきれいな口ゼであった。陳が切り取った尻肉を切り分け、テキパキと皆の皿に盛り付けて配った。

「素晴らしい！しっとりとしていて、ジューシだ」
「塩加減も丁度いい。それに柔らかく口の中で蕩けるようだ」

「こんなに風味があつて、美味しい肉は初めてだ」

「果物と野菜だけを与えていたのでまったく癖が無いな」

皆、口々に賞賛の声をあげた。

「気に入っていただけで、光栄です」

陳が、自分のきれいに剃り上げられた頭部を手で擦りながら、満面の笑みを浮かべた。

「今度は太腿肉だ」

「私は臍肉を食したい」

「おっぱいを切ってくれ」

重役達が望みの部位を欲情に満ちた視線で見詰
めながら、陳に注文した。陳は額に汗を浮かべな
がら、次々と沙織の裸身を捌いていった。

第五章 超高級人肉レストラン

第六章 生贄